「研究計画・目的」

今日、ファンタジーは、文学のみならず、アニメ、コミック、ゲーム、映画といった様々なメディアで創作され、世界的な市場で流通している。本研究は、近代においてどのようにファンタジーというジャンルの形成がなされたのかという問題意識の下に、近代文学という領域とファンタジーというジャンルがどのような関係性を持つのかを明らかにするという大きな研究プロジェクトの一部となるものである。

今回の研究では、『アラビアンナイト』の受容という問題を取り上げる。『アラビアンナイト』というテクストは、フランス語訳や英語訳を始めとして、様々な言語に翻訳されて世界中に広がっている。そして、演劇や映画等を通じて多様な表象が流通し、その表象は今日まで常に更新され続けている。『アラビアンナイト』は、東西交流における異文化受容の産物であり、新しい文化を生成し続けているテクストなのである。

研究計画は、英国近代において『アラビアンナイト』がファンタジーという新たなジャンルの生成へと展開していった状況と、その際に生み出された作品について調査し、『アラビアンナイト』が具体的な作品においてどのように受容されたのかを明らかにするというものである。その際、英国における研究状況の現状、特にオリエンタリズムを論じる際の政治的な立ち位置の問題が、エドワード・サイード『オリエンタリズム』(1978)において提示された問題を踏まえて現在どのように議論されているのかについても明らかにする。そして、英国近代においてオリエンタリズムの受容がファンタジーという文学ジャンルの形成に寄与したことを明らかにすることを目的とする。

「研究活動」

英国のSOAS(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院)に在外研究員として所属し、SOASの研究会に参加して研究テーマを深めた。また、SOAS の図書館や大英図書館で文献調を行った。

「研究成果」　　１．サイード『オリエンタリズム』に対する批評的な視座

『オリエンタリズム』において、オリエンタリズムとは西洋が植民地との関係を通して作り上げた〈他者〉のイメージであり、同時に、西洋の文明・文化の構成要素であると論じられた。このサイードによるオリエンタリズムをめぐる概念は、『アラビアンナイト』の受容という問題において、現在、批評的な乗り越えがなされている。

Marina Warner “Stranger Magic: Charmed States and the Arabian Nights”（注１)は、『アラビアンナイト』が研究される際には二つの読み方が存在していると指摘する。一つはサイード『オリエンタリズム』に影響を受けたイデオロギー的読解であり、オリエンタルな幻想を取り除いて「現実」を救出しようとする読み方である。そしてもう一つは、そのような読み方に反対して『アラビアンナイト』をマジカルリアリズムのテクストとして読むという読み方であるという。さらに、著者は『アラビアンナイト』を“Travelling Text”と位置付け、“travelling text is not only European invention but also an Oriental one”と述べる。Travelling Text” としての『アラビアンナイト』は、「西洋／東洋」という枠組みを超える存在として再定義されている。

この Marina Warner の論を受けて、Melissa Dickson “Cultural Encounters with the Arabian Nights in Nineteen-Century Britain”（注２）は、サイード『オリエンタリズム』に則したイデオロギー的読解について以下のように批判する。

It was an approach, however, that was significantly undercut by the inherent multiplicity of the working in question, a work that does not represent a clearly

defined, single ‘reality’, but rather numerous forms of time, space and culture.
そして、オリエンタリズムを ” Cultural Encounter” という新たな概念において考察していくことを提案する。

Cultural Encounters approaches the Arabian Nights not as an instrument of imperialist ideologies, but as dynamic site of cultural exchange, receptive readership and cross-cultural transmission.

以上のように、『アラビアンナイト』の受容をめぐる研究において、オリエンタリズムは “Travelling Text”、” Cultural Encounter” といった新しい枠組みに再編されて研究が進められている。

２．ビクトリア朝における『アラビアンナイト』の受容をめぐる状況

英国ビクトリア朝における『アラビアンナイト』の受容については、①科学技術の発展に伴って生じた新しい経験が「Magic」として表象されていくこと、②産業革命降の社会における消費文化の発展と出版授業の拡大、そして読者数の増大、③消費者としての女性・子どもの台頭と、消費行為が行なわれる場としての家庭という空間の顕在化、④スピリチュアリズムの流行、特に女性によってスピリチュアリズムが広がっていったという同時代状況との関わりの中で論じられている。

Chris Goto-Jones “Conjuring Asia; Magic, Orientalism, and the Making of the Modern World”（注３）は、産業革命後の英国で科学的思考が普及する一方、「Magic」が再編されてオリエンタリズムと強く結び付いていく歴史的状況を論じた。また、Jane Suzanne Carroll “British Children’s Literature and Material Culture: Commodities and Consumption 1850-1914” (注４)は、ビクトリア朝における出版事業の展開と読者の増大が 1865 年『不思議な国のアリス』出版へと帰結し、1860 年代以降に児童文学の黄金時代（‘golden age’ of the children’s literature）を迎えたこと、その時期に流行していくファンタジーという文学ジャンルの背景には、家庭の中でのスピリチュアリズの流行があったことを指摘した。当時、人気を博していた Maria B. Hayden のスピリチュアリズムは、一般的な家庭の居間が超自然な場所へと変容することを示して見せたのであり、日常がファンタジックで魔法的な空間へと変わるというファンタジー文学の世界設定を準備するのに役立ったと論じられてもいる。ビクトリア朝ロンドンで霊媒師として活躍した Maria B. Hayden については、近年、Sharon DeBartolo Carmack “ In Search of Maria B. Hayden: The American Medium Who Brought Spiritualism to the U.K ”（注５）という文献が出版され詳細な調査がなされた。

３．「子ども」をめぐる議論

『アラビアンナイト』の受容の問題として重要なのは、英国において『アラビアンナイト』は“Fairy Tale”と並び、子供向けの本として多数出版されたという事態である（注６）。ビクトリア朝においては「子ども」という存在が脚光を浴びていた。当時、ジャン・ジャック・ルソー、ウィリアム・ブレイク、ウィリアム・ワーズワースといったロマン主義のテクストにおける子ども観が流行するなかで（注７）、社会的には子どもに関する慈善事業が成長し、中流階級家庭における子どもの教育への関心が高まっていた（注８）。そして「子ども」への関心は、「子ども」を主人公とする文学作品の流行をもたらした。文学テクストには、“perfect child”という子ども像が描かれるようになった（注９）。

４．E.ネズビットの作品におけるオリエンタリズムの受容の状況

『アラビアンナイト』の受容がファンタジーという文学ジャンルへと展開していく状況は、E.ネズビットの作品において明らかになる。E.ネズビットは、英国近代において児童文学

というジャンルを築き上げた作家の一人であり、彼女の作品は、その後、C.S.ルイスの作品を始めとするファンタジー文学に大きな影響を与えた（注 10）。

E.ネズビットは、1902 年 4 月から 12 月まで、雑誌“The Strand Magazine”で“The Psammead”を連載した。“The Psammead ”の主人公はロンドンから田舎の「白い家」に引っ越した五人きょうだいの子どもたちである。彼らの住む「白い家」は「『アラビアンナイト』から抜け出した魔法の街のような」（like an enchanted city out of the Arabian Nights）場所に建っている。子どもたちは近所の砂利採取場で“jinn”の“Psammead” に出会い、様々な願いをかなえてもらうが、その結果、次々と事件が起きるというのが物語の筋である。ところで“jinn”とは『アラビアンナイト』の物語の中に現れる精霊の名前である。“The Psammead ”は、『アラビアンナイト』で語られる「魔法」（magic） を、子どもたちの日常の中で再現してみせた物語なのである。

この“The Psammead ”は好評を博し、連載終了後“Five Children and It”と題名を変えて単行本として出版された。さらに E.ネズビットは“The Psammead ”以降も、“The Strand Magazine”誌上で「魔法」を主題とする子どもたちの物語の連載を続けたのである。“The Strand Magazine”はコナン・ドイル『シャーロック・ホームズ』シリーズを連載したことで有名な雑誌であるが、ミステリーのみならずファンタジーという文学ジャンルの確立にも貢献したメディアといえよう（注 11）。

このように E.ネズビットの作品においては『アラビアンナイト』の「魔法」の世界が子どもたちの日常に接続されている。このような物語世界の設定の方法は、後のファンタジー文学に大きな影響を与えることになった。E.ネズビットは、子ども向けの最初の作品として 1899 年に“The Story of the Treasure Seekers”を出版た。“The Story of the Treasure Seekers”は、“Alice”, “Noel”, “Oswald”, “Dora”, “Dicky”らきょうだいの子どもたちが主人公であり、事業に失敗して財産を失った親の代わりに、彼らが宝探しをして財産を取り戻そうとする物語である。また、語り手も子どもである。この作品において「魔法」はまだ日常世界に出現する手前にある一方で、子どもの視点を通して子どもたちが「魔法」に接近していく様態が語られている。その様子は『アラビアンナイト』が引用される第六章で顕著である。

第六章では、公園に出かけた子どもたちは「熊狩り」のごっこ遊びを始める。

> Alice whispered—
>
> ‘I see the white witch bear yonder among the trees! Let’s track it and slay it in its lair.’
>
> ‘I am the bear,’ said Noel; so he crept away, and we followed him among the trees. Often the witch bear was out of sight, and then you didn’t know where it would jump out from; but sometimes we saw it, and just followed.
>
> ‘When we catch it there’ll be a great fight,’ said Oswald; ‘and I shall be Count Folko of Mont Faucon.’
>
> ‘I’ll be Gabrielle,’ said Dora. She is the only one of us who likes doing girl’s parts.
>
> ‘I’ll be Sintram,’ said Alice; ‘and H. O. can be the Little Master.’
>
> ‘What about Dicky?’
>
> ‘Oh, I can be the Pilgrim with the bones.’

この場面で子供たちが挙げる“bear”,“Folko of Mont Faucon”,“Gabrielle”, “Sintram”, “the Little Master”, “the Pilgrim with the bones” とは、フリードリヒ・フーケ（Friedrich de la Motte Fouqué）の作品『ジントラムの道連れ』（“Sintram and His Companions”）に登場するキャラクターなのである。オリジナルのドイツ語版は 1814 年に出版され、まもなく英語版が翻訳出版されると、英語圏では子どもの読み物と

して広く普及した（注 12）。熊狩りごっこの場面から、『ジントラムの道連れ』が子どもたちの想像力に大きな影響を与えていたことが分かる。

さらに、「熊狩り」の途中で、子どもたちは公園の中に壁があるのを発見する。壁にはドアが付いていて、彼らはドアを通り抜ける。すると、子どもの一人ノエルは、ドアの向こうに“chine doll” のような少女がいるのを発見する。

> Noel had forgotten about the bear, and he was taking his favourite part, so he said—'I'm Prince Camaralzaman.'
>
> The funny little girl looked pleased—
>
> 'I thought at first you were a common boy,' she said. Then she saw the rest of us and said—
>
> 'Are you all Princesses and Princes too?'
>
> Of course we said 'Yes,' and she said—
>
> 'I am a Princess also.' She said it very well too, exactly as if it were true. We were very glad, because it is so seldom you meet any children who can begin to play right off without having everything explained to them. And even then they will say they are going to 'pretend to be' a lion, or a witch, or a king. Now this little girl just said 'I am a Princess.'

この場面でノエルは新しいごっこ遊びを始めている。彼の‘ I ’ m Prince Camaralzaman’という言葉から、ノエルは『アラビアンナイト』に収録された物語“The Adventures of Prince Camaralzaman and the Princess Badoura”を引用していることが分かる。彼は、ごっこ遊びによって『アラビアンナイト』の世界を再現しようとするのであり、見知らぬ少女もそのごっこ遊びの想像力を彼らと共有したことが喜びをもって語られている。

以上のように、“The Story of the Treasure Seekers”において、子どもたちは、読書によって様々な世界の物語に触れ、遊びによってその世界を想像的に再現している。そもそも、彼らが行っている「宝探し」もまた、ごっこ遊びの中にある。子どもたちは遊びにおいて金を稼がなくてはいけない大人を模倣しているのであり、彼らは、現実の世界に対して想像的に関係を持とうとする。つまり、ごっこ遊びとは、日常の中に想像の世こ遊びの主体として想像的世界の主人公となる。この想像的世界は「魔法」の世界のすぐ隣にある。“The Story of the Treasure Seekers”では、子どもたちがドアを潜り抜けると『アラビアンナイト』の世界が現れるのである。

このように、E.ネズビットの作品では、大人を模倣しつつも大人とは異なる世界を生きることができる子どもたちが描かれている。このような主人公を登場させたことによって、E.ネズビットの作品は子どものための読み物に留まらず、ファンタジーという文学ジャンルを新たに切り開くことになった。『アラビアンナイト』は子どもという主人公と結びつき、ファンタジーというジャンルの形成へと進んで行ったのである。

「今後の展望」

まず、近代日本において『アラビアンナイト』の受容がもたらした影響とはどのようなものであったのかを明らかにする予定である。日清戦争後（1895 年～）の博文館を始めとする出版事業の発展によって子ども向けの読み物の出版が進み、巌谷小波や正宗白鳥らが『アラビアンナイト』の翻訳に取り組んでいる。また、『アラビアンナイト』は当時の中学校の英語の教材として広く使用されており、若者たちに広く受容されていた。これらの状況から、近代日本において『アラビアンナイト』が子どもや若者たちの想像力に与えた影響を調査したい。

次に、近代日本における子ども観の定位と、主人公としての子ども像の変遷について

調査を行う。従来の研究では、鈴木三重吉による雑誌『赤い鳥』の創刊（1918 年～）を契機に「童話」が誕生し、「子どもらしさ」としての「童心」が表現されるようになったとされている。また、大正期はエレン・ケイ『児童の世紀』の翻訳がなされ、自由主義教育が盛んになった時期でもある。その一方で、谷崎潤一郎の作品においては主人公として異なる子ども像が現れている。日清戦争以降の近代日本の子ども観を調査し、英国近代の子ども観と比較することによって、近代という経験の固有性について検証したい。さらに、近代日本におけるファンタジーという文学ジャンルの成立について調査を行う。谷崎潤一郎の作品では、度々ごっこ遊びによるファンタジーが描かれる一方で、自然主義文学においては「想像」は好ましくないものとみなされていた。また、近代日本の教育政策においても、学生の想像力を喚起することは規制の対象となった。そのような時代状況下で、ファンタジーというジャンルの成立は可能であったのか、あるいは、1945 年以降になってファンタジーは成立したとみなされるのか調査を行いたい。

以上の調査・検証を行った上で、従来「大人向けの文学／子供向けの童話」あるいは「ハイカルチャー・メインカルチャー／サブカルチャー」といった二項対立的な関係の中で論じられていたファンタジーというジャンルを、二項対立の下位概念ではなく、近代が生み出した文化の一つとして積極的に論じるための視座を明確にしていく。

「教育への効果」

東西交流における異文化受容と文化生成という歴史的な状況を明らかにすることによって、日本近代文学に関する教育が、単なるローカルな地域の文学を教えることに留まるのではなく、日本近代文学を出発点として、そこからグローバルな世界との交流という大きな枠組みにおいて考察するための視座を与えるという効果がもたらされる。

注

1 Marina Warner “Stranger Magic: Charmed States and the Arabian Nights” (Harvard University Press, 2012).

2 Melissa Dickson “Cultural Encounters with the Arabian Nights in Nineteen-Century Britain” (Edinburgh University Press, 2019).

3 Chris Goto-Jones “Conjuring Asia; Magic, Orientalism, and the Making of the Modern World”(Cambridge University Press, 2016).

4 Jane Suzanne Carroll “ British Children ’ s Literature and Material Culture: Commodities and Consumption 1850-1914” (Bloomsbury Academic, 2022).

5 Sharon DeBartolo Carmack “ In Search of Maria B. Hayden: The American Medium Who Brought Spiritualism to the U.K” (Scattered Leaves Press, 2020).

6 Caroline Sumpter “The Victorian Press and the Fairy Tale”(Palgrave Macmillan, 2011).

7 Ann Wierda Rowland “Romanticism and Childhood: The Infantilization of British Literary Culture” (Cambridge University Press, 2012).

8 Catherine Robson “Men in Wonderland: The Lost Girlhood of The Victorian Gentleman” (Princeton University Press, 2001).

9 Amberyl Malkovich “Charles Dickens and The Victorian Child; Romanticizing and Socializing the Imperfect Child ” (Routledge, 2013) ,Christopher Parkes “Children ‘s Literature and Capitalism; Fictions of Social Mobility in Britain” (Palgrave Macmillan, 2012）.

10 E. Nesbit に関する研究としては、Julia Briggs “A Woman of Passion: The Life of E. Nesbit 1858-1924”,（New Amsterdam books, 1987）、Elisabeth Galvin “The

Extraordinary Life of E. Nesbit”（Pen and Sword Books Limited, 2018）、Eleanor Fitzsimons “The Life and Loves of E. Nesbit” （Duckworth Books, 2019）が出版されている。

11 “The Strand Magazine”が、当時台頭していたミドルクラスの男性、および女性、そして子どもを読者としていたことについては、以下の文献で考察されている。Kate Jackson “George Newnes and the New Journalism in Britain, 1880-1910: Culture and Profit”（Ashgate Publishing, 2001）、Jonathan Cranfield “Twentieth-Century Victorian; Arthur Conan Doyle and the Strand Magazine, （1891-1930”, Edinburgh University Press, 2016）.

12 David Blamires “Telling Tales: The Impact of Germany on English Children’s Books 1780-1918”（Open Book Publishers, 2009）.